



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

地域創造レター

2月号—No.321

2022.1.25

(毎月1回25日発行)

News Letter to Arts Crew

【マリーゴールド】マリーゴールドの花のような鮮やかな赤みの強い黄色。

あいみょんの歌でお馴染みのキク科紅黄草族の花の色。「聖母マリアの黄金の花」という意味。原産地のメキシコでは日本のお盆にあたる「死者の日」にあの世から死者を招く花として大量に飾り付けられる。名前のイメージとは異なり、独特の臭気があり、毒もあり、死者を招く花だと知ると、歌の印象も変わるのではないだろうか。

●目次 / contents

今月のニュース..... 2

令和3年度「公共ホール現代ダンス活性化事業」事例紹介

財団からのお知らせ..... 4

「リージョナルシアター事業」派遣アーティスト募集

地域創造発行物のご案内

今月の情報..... 5

地域通信 / オンラインを活用した取り組み / アーツセンター情報

制作基礎知識シリーズ Vol.50..... 10

落語の業界構造

今月のレポート..... 12

北海道深川市 深川市文化交流ホールみ・らい

音楽劇 みらいSHOW学校 劇と音楽の展覧会『時をこえて深川』

発行元：一般財団法人地域創造
〒107-0052 東京都港区赤坂2-9-11
オリックス赤坂2丁目ビル 9F
Tel. 03-5573-4183 Fax. 03-5573-4060
URL: <https://www.jafra.or.jp/>

●令和3年度「公共ホール現代ダンス活性化事業」事例紹介

各地でコンテンポラリーダンス作品を届ける工夫

令和3年度

「公共ホール現代ダンス活性化事業」事例紹介

写真

1: 市民と創造するダンス公演『舞踏 豊橋妖怪百物語』(2021年11月21日)

©萩原ヤスオ

2: 『舞踏 豊橋妖怪百物語』クリエーションの様子

3: 高校生と一緒に創るダンス公演『Taiwanwan』クリエーションの様子

4: ニュアーン『クリスマス』(2021年12月19日)

●公共ホール現代ダンス活性化事業

(通称:ダン活)

地域創造がコンテンポラリーダンスの登録アーティストと専門家のコーディネーターを地域に派遣。コーディネーターのサポートのもと、公共ホールとアーティストが共同で企画した地域交流プログラムや公演を実施する事業。A、B、Cの3つのプログラムを継続して実施することが可能。

●Aプログラム(地域交流プログラム)

4日間で学校や福祉施設等でのアウトリーチ、公募ワークショップを4~6回実施するプログラム。

●Bプログラム(市民参加作品創作プログラム)

全9日間の日程を3日間+6日間など2回に分け、市民参加作品を創作し有料公演を実施するプログラム。また、併せて公募ワークショップを1回実施。

●Cプログラム(公演プログラム)

4日間で登録アーティストのレパトリー作品の有料公演を実施するプログラム。また、併せて公募ワークショップを1回実施。

●公共ホール現代ダンス活性化事業(ダン活)に関する問い合わせ

芸術環境部 児島・畑・長瀬

Tel. 03-5573-4077

dankatsu@ajfra.or.jp



地域創造では、コンテンポラリーダンスを通じた創造性豊かな地域づくりを目指し、アーティストとコーディネーターを派遣する「公共ホール現代ダンス活性化事業(通称:ダン活)」を実施しています。2017年度にはプログラムを大幅リニューアルし、A・B・Cの3つのプログラムを、地域のニーズに合わせた順番で段階的・継続的に実施できる3カ年事業になりました。

今年度は、登録アーティスト7組が全国14地域で事業を展開しています。リニューアルから5年目となり、Bプログラムでは地元の民話を題材としたダンスを市民と共に創作するなど、画期的な成果も生まれています。今号では、3年目を終えた穂の国とよはし芸術劇場PLAT(愛知県豊橋市)と白河文化交流館コミネス(福島県白河市)、2年目の野々市市情報交流館カメラア(石川県野々市市)の取り組みを紹介します。

●地域の民話を題材にした舞踏に挑戦(穂の国とよはし芸術劇場PLAT)

豊橋駅と直結した穂の国とよはし芸術劇場PLATは、東三河地域における芸術文化の創造・発信・交流拠点として活発な自主事業を展

開し、高校生や市民が集う参加型事業にも力を入れています。ダン活では1年目の2017年度に鈴木ユキオさん(Cプログラム)、2年目に大駱駝艦の舞踏手である田村一行さん(Aプログラム)を招き、最終年度の総仕上げとしてBプログラムで田村さんと共に市民参加による舞踏に挑戦しました。

作品のテーマは「妖怪」。田村さんがダン活で初めて豊橋市を訪れた時のリサーチ中に偶然見つけた書籍『豊橋妖怪百物語』から着想したものです。クリエーションの前に行う現地見では、民話にまつわる名所を巡って本の著者である内浦有美さんからお話を伺う「豊橋妖怪ツアー」を実施し、イメージを膨らませました。

7月と11月の2回、合計9日間にわたって行われたクリエーションには、「舞踏に挑戦してみたい」「妖怪に興味がある」など、さまざまな応募動機をもつ20歳代から60歳代の男女12人が参加。本番当日は、出演者自ら練り白粉で顔や手足を白く化粧して妖怪に変身。内浦さんの朗読と、琵琶奏者による生演奏も加わり、満席の会場は妖怪の世界へと誘われました。

田村さんは、「豊橋は、日常生活と異世界を

結ぶ入り口がゴロゴロしている面白い街。原作となる書籍があったこと、その著者と出会えたことが作品にも大きく影響した。舞踏は、身体の見えない部分(どんな思いがそこにあるのか)が身体の動きをつくる。踊りのイメージを言葉で共有しあうことによって、出演者それぞれにとって、自分らしく密度のある踊りに繋がれば」と振り返っていました。

また、担当の大橋玲さんは、「白塗りした参加者とチラシ用の写真を撮影したり、オンライン稽古を企画したり、工夫・挑戦することができた。参加者やお客さんの反応も演劇とは異なる部分が多く、新しい発見もあった。今後も、市民参加型のダンスを継続していきたい」と確かな手応えを感じているようでした。

●高校生と育むコミュニケーションのダンス (白河文化交流館コミネス)

白河文化交流館コミネスでもダン活3年目の総仕上げとしてBプログラムに取り組みました。担当の中沢千早さんは、「昨年度、Cプログラムで上演した康本雅子さんのレパトリー作品は、コロナ禍ということもあり集客に苦戦したが、康本さんのダンスを若い世代にもっと届けたい」との思いから、引き続き康本さんを招聘し、「対話」をテーマにした市民参加作品を創作しました。

コミネスでは参加対象者を中高生に絞り、出演者だけでなく公演スタッフも公募しました。担当の佐々木郁哉さんは、「開館5周年を迎え、ホールを訪れる市民が固定化してきた感覚があった。新しい市民と出会いたくて対象を絞ったが、広く公募したときには出会えなかった高校生が参加してくれた。さまざまな立場で公演をつくることを楽しんでもらい、今後も自主的に創作する意識が芽生えたら」と話します。

また、地域の高校生の活動を支援する「コミュニティ・カフェ EMANON」と連携し、中高生に向けた情報発信に取り組みました。カフェの運営を担う(一社)未来の準備室の青砥和希さんは「市内に大学がなく、高校生は地域で何かに挑戦するイメージをもちにくい。参加を迷う

高校生には話を聞き後押しをした」と振り返りました。

●舞台上に客席を設置し、迫力あるダンス公演を実現(野々市市情報交流館カメラア)

野々市市情報交流館カメラアでは、1年目の2019年度は長井江里奈さん(Aプログラム)、2年目となった今年度はCプログラムで藤田善宏さんを招きました。担当の松田尚子さんは、「コンテンポラリーダンスに馴染みのない地域だったので、市民参加作品を上演するBプログラムを最終目標として、市民の間でダンスの機運が高まるようプログラムを組み立てた」と話します。

金沢市に隣接するベッドタウンの野々市市は、大学もあることから市民の平均年齢が41.5歳(2020年)と若い世代が多く暮らしているのが特徴です。公演日が12月中旬であったことから、藤田さんは自らのパフォーマンスユニット「ニヴァンテ」のレパトリーの中からクリスマスをテーマに親子で楽しめる『クリスとスマス』を上演作品として提案。また、会場がカメラア姉妹館の文化会館フォルテ大ホール(定員832名)になったことから、観客に間近でダンスを体感してもらうため、舞台上に客席を設置。公演後のアンケートでは「演者の息遣いや額の汗まで見ることができ、迫力いっぱいのステージだった」「言葉が少なくても表情や手などで気持ちが伝わってきて素敵でした」といった感想が寄せられました。

また、松田さんは、「今回の公演を通して、普段あまり交流のないカメラアスタッフと大ホールの管理を委託しているテクニカルスタッフが一緒に客席や演出について考える機会になった」と話し、市民とホールだけでなく、ホール内の距離感も近づいたダンス公演となりました。

※

身体表現であるコンテンポラリーダンスは言葉にすることが難しく、市民に事業内容をどう届けるかが課題になることもありますが、各地で工夫を凝らした企画が実施されています。これまでの事例を掲載した事業報告書をホームページで公開していますので、ご参照の上、ぜひダン活をご活用ください。



高校生と一緒に創るダンス公演「Taiwan wan」クリエーションの様子

●2021・2022年度登録アーティスト
北尾亘、田村一行、中村春、長井江里奈、藤田善宏、マニシア、康本雅子

●公共ホール現代ダンス活性化事業報告書
<https://www.jafra.or.jp/about/report/6812.html>

▼財団からのお知らせ

地域創造からのお知らせを毎月掲載します

財団からのお知らせ

●「リージョナルシアター事業」派遣アーティスト募集

この事業は、演劇の演出家、俳優等(以下、「派遣アーティスト」)を地域のホールに派遣し、地域の課題や展望などを踏まえながら、派遣アーティストとホールとの共同企画により、演劇の手法を用いた地域独自のさまざまなプログラム(子どもたちを対象とした学校でのアウトリーチや、学校の先生や行政職員、地域の人々を対象としたワークショップなど)を実施するものです。演劇の手法を使ったワークショップにふれることで、創造性豊かな地域づくりを目指します。

このたび、地域の環境づくりに寄与する意欲のある派遣アーティストを募集します。選考に当たっては、ファシリテーターとして公共ホール等と協働して演劇を元に地域の課題等に向き合う意思があること、幅広い層にアプローチできるプログラムを企画できること、地域住民や表現者等との交流を積極的に行う意思とアイデアがあること等を考慮して選考を行います。

事業の趣旨にご賛同いただけるアーティストの方々からのご応募をお待ちしております。

また、公立文化施設等の担当者の方々には、地域で活躍するアーティストをご紹介いただければ幸いです。

◎派遣アーティスト募集概要

[応募条件]

- ① 演劇の演出家・俳優等として活動し、複数の舞台公演の経験があり、今後、継続的に活動していく意思のある方
- ② ファシリテーターとして地域等において今後活動していく意思のある方

[選考日程]

【第1次選考】2022年5月30日(月)

選考方法：書類選考

【第2次選考】2022年8月8日(月)～10日(水)

選考方法：地域創造にて第1次選考合格者を対象に実施。40分間でワークショッププログラムのデモンストレーションと審査員とのディスカッションを行う。

[提出資料]

- ① 応募用紙(要プロフィール写真)
- ② 映像資料(アウトリーチを含むワークショップや公演の映像等、自身の活動がPRできるようにまとめた映像)
- ③ 補足資料(過去に実施した、アウトリーチを含むワークショップや公演のうち、代表的なものの写真、チラシ、新聞等掲載記事等)

[募集要項]

募集要項および応募用紙は当財団ホームページに掲載しています(<https://www.jafra.or.jp/docs/8077.html>)。詳細は担当までお問い合わせください。

[応募締切]

2022年4月11日(月) ※当日消印有効

●地域創造発行物のご案内

文化・芸術を通じた地域づくりの事例を紹介する雑誌『地域創造』のバックナンバーや、地域創造レターで長年にわたって連載してきた制作基礎知識シリーズを中心にまとめたハンドブック『公立ホール・劇場職員のための制作基礎知識 増補版 2021年』などは、地域創造のホームページから入手が可能です。

*入手方法はこちらからご確認ください。<https://www.jafra.or.jp/library/nyushu/application/>



『地域創造』第47号
特集：レジデンス再考/well-being(よりよく生きる)



『地域創造』第46号
特集：コロナ時代/暮らしとアート



『地域創造』第45号
特集：美術館リニューアル/パブリック・プログラムを考える



『公立ホール・劇場職員のための制作基礎知識 増補版 2021年』

●リージョナルシアター事業に関する問い合わせ

芸術環境部 栗林・田中
Tel. 03-5573-4124
regional@jafra.or.jp

●地域創造発行物に関する問い合わせ

芸術環境部 梅村
Tel. 03-5573-4066

▼— 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

地域通信

●地域通信欄掲載情報について

新型コロナウイルス感染症の影響により、イベントが中止となる場合や、開催内容・日程等が一部変更となる場合がございます。最新の情報は主催者の発表情報をご確認ください。

北海道・東北

●札幌市

札幌芸術の森美術館
〒005-0864 札幌市南区芸術の森2-75
Tel. 011-591-0090 橋本柚香
<https://artpark.or.jp/>

きみのみかた みんなのみかた

美術作品の多様な見方を受け止め、一人ひとりの心の動きに寄り添う展覧会。幾何学的な図形で構成された絵画の展示では、来場者がさまざまな色・サイズの図形シールを自由に選んで台紙に貼る作業を行い、互いに見せあうことで表現の可能性を実感できる。彫刻の展示では、来場者が手元のスイッチで照明の色を切り替えることが可能で、光の色の違いによって作品から感じ取る印象の変化を体験できる。
[日程] 1月22日～3月13日
[会場] 札幌芸術の森美術館

●北海道旭川市

北海道立旭川美術館
〒070-0044 旭川市常磐公園内
Tel. 0166-25-2577 門間仁史
<https://artmuseum.pref.hokkaido.lg.jp/abj>

神田一明、日勝展

画家・神田一明と、早世した弟・日勝による、生前実現しなかった兄弟二人の展覧会。道立美術館や神田日勝記念美術館が所蔵する二人の代表的な作品を中心に、旭川で活動が続ける一明の主要な作品から近作までを加えて、画家として別々の道を歩んだ兄弟の足跡と、決して途切

れることのなかった絆を描き出す。道内の美術館等が連携し、各々の施設や所蔵作品を相互に紹介する「アートギャラリー北海道」事業の一環として開催。
[日程] 2021年12月18日～3月13日
[会場] 北海道立旭川美術館



神田日勝《馬》(1965年/油彩、ベニヤ板/神田日勝記念美術館蔵)

●仙台市

仙台市青年文化センター
〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5
Tel. 022-276-2110 内山直子
<https://www.sendaiycc.jp/>

日立システムズホール仙台 パフォーマンスフェスティバル

新型コロナウイルス感染症の拡大で苦境に立たされた実演芸術家や舞台スタッフたちを応援するため、ジャンルを超えた実演芸術の祭典を初開催。音楽や演劇をはじめとしたさまざまなジャンルのスペシャルゲストと共に、40組以上の一般公募の中から選ばれたパフォーマーたちが“おまつり”を盛り上げる。また来年度以降の継続開催に向けたクラウドファンディングにも挑戦している。

[日程] 2月26日、27日
[会場] 日立システムズホール仙台

関東

●千葉市

千葉市美術館
〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8
Tel. 043-221-2311 田辺昌子
<https://www.ccma-net.jp/>

ジャポニスム 世界を魅了した浮世絵

19世紀後期～20世紀初めにかけて、日本の美術工芸品、中でも浮世絵版画は多くの西洋画家たちに影響を与え、ジャポニスムという動向として世界中に広がった。浮世絵の名品を中心に、欧米、ロシアからジャポニスムの作品を加えた約220点を展示することで、ジャポニスムの画家たちが浮世絵から取り入れた視点をきっかけに、浮世絵の特性と魅力を再発見する。
[日程] 1月12日～3月6日
[会場] 千葉市美術館

●千葉県旭市

千葉県東総文化会館
〒289-2521 旭市ハの666
Tel. 0479-64-2001 浅野哲
<https://www.cbs.or.jp/tosoi/>

令和3年度県民芸術劇場公演 震災復興祈念

「東総の第九2022」演奏会
平成5年に始まり今回で21回目となる第九演奏会を開館30周年記念事業として開催。千葉交響楽団、ちば県民合唱団、あさひ少年少女合唱団が出演、世代間の垣根を超えた交流を図る。また、ソリストはオーディションで選ばれ、若いアーティストたちを発掘。演奏会への出演機会を設けることで、飛躍する機会を提供する。
[日程] 2月6日
[会場] 千葉県東総文化会館

●東京都世田谷区

世田谷美術館
〒157-0075 世田谷区砧公園1-2
Tel. 03-3415-6011 矢野進
<https://www.setagayaartmuseum.or.jp/>

ミュージアム コレクションⅢ ART/MUSIC わたしたちの創作は音楽とともにある

音楽と美術をテーマに、新たな視点で収蔵品を紹介。ミュージシャンでもある大竹伸朗、実験的な音楽も手がけたデュビュツ

●データの見方

情報は地域ブロック別に、開催地の北から順に掲載してあります。●で表示しているのは開催地です。📍マークが付いている事業は地域創造の助成事業です。ラインの下は、事業運営主体、住所、電話番号、担当者名の順に記載してあります。色帯部分が事業名で、以下、内容を紹介しています。

●地域ブロック

[北海道・東北] 北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
[関東] 茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
[北陸・中部] 新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
[近畿] 三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
[中国・四国] 鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
[九州・沖縄] 福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

●情報提供先

ファックス、電話、e-mailでお願いします。
Fax. 03-5573-4060 Tel. 03-5573-4183
letter@jafra.or.jp
地域創造情報担当 藤原・梅村

●2022年4月号情報締切

2022年2月25日(金)

●2022年4月号掲載対象情報

2022年4月～6月に開催もしくは募集されるもの

フェ、自ら作曲して楽譜を出版し、アトリエでヴァイオリンの演奏もしていたルソー、不思議な楽譜を作品に描いたヴェルブリ、レコードジャケットをデザインしたラウシェンバークなど、芸術家たちの創作と音楽との関係を、展示作品44点で見ていく。

[日程]2021年12月4日～4月10日
[会場]世田谷美術館

●神奈川県藤沢市

藤沢市みらい創造財団
〒251-0026 藤沢市鶴沼東8-1
Tel. 0466-28-1135 竹内康仁
<https://f-mirai.jp/>

第24回藤沢市民オペラ G.ヴェルディ『ナブッコ』

市民、プロの音楽家、行政の協働で制作・公演する藤沢市民オペラは1973年からの長い歴史を誇る。2015年から、1年目に招聘公演、2年目に演奏会形式の公演、3年目に市民オペラ公演という3年1シーズン制を敷いており、当公演は2018-2021シーズンの最終章となる。園田隆一郎指揮の下、プロのソリスト陣と藤沢市民交響楽団、藤沢市合唱連盟といった市民団体との共演で、合唱オペラとして名高い『ナブッコ』をつくり上げる。

[日程]2月26日、27日、3月5日、6日
[会場]藤沢市民会館



2017年藤沢市民オペラ『トスカ』

北陸・中部

●新潟市

りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館
〒951-8132 新潟市中央区一番堀通町3-2

Tel. 025-224-7000 中粉将樹
<https://www.ryutopia.or.jp/>

ステイ・アット・ニイガタ・コンサート～新潟ゆかりのアーティストによるガラ・コンサート～

新型コロナウイルスの影響により相次いで公演が中止となった2020年、公演を待ち望む人々に「生」の音楽を届けること、また地元演奏家の支援・演奏活動の創出を目指し、新潟ゆかりの演奏家によるガラコンサートを始動。2回目となる今回も公募で選ばれた12組のバラエティに富んだ演奏家が登場する。全6公演(2日間)のうち、好きな公演を自由にセレクトできる3公演セット券を設定。

[日程]2月11日、12日
[会場]りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館

●石川県金沢市

石川県音楽文化振興事業団
〒920-0856 金沢市昭和町20-1
Tel. 076-232-8111 大海文
<https://ongakudo.jp/>

オーケストラ・アンサンブル金沢 和洋の響II 邦楽器と管弦楽のための新旧2作とノルウェー、 ペール・ギュントの物語

昨年度初めて開催された、公募による優秀作品をオーケストラ・アンサンブル金沢の演奏で初披露する企画の2回目。若手作曲家を対象に、能舞と合わせる事が可能な邦楽器を取り入れたオーケストラ作品を募集。今回は北方喜旺丈の『随喜乃涙』が優秀作品に選ばれ、指揮に広上淳一、ゲストに能楽師の渡邊



昨年度の公演の様子(旭井翔一『雲烟濛濛』)

荀之助らを迎えて披露される。ほかにも、鈴木行一の「筆箒とオーケストラのための『森と星々の河』」なども演奏予定。

[日程]2月8日
[会場]石川県立音楽堂

●岐阜県岐阜市

岐阜県教育文化財団
〒502-0841 岐阜市学園町3-42
Tel. 058-233-8164 河尻香代子
<https://seiryu-plaza.jp/>

岐阜・鹿児島姉妹県盟約50周年記念 朗読劇『千本松原』

岐阜県と鹿児島県との姉妹県盟約の締結から50周年を記念して、郷土を舞台に上演する長編朗読劇。岐阜出身の児童文学者・岸武雄が薩摩藩士による宝暦の治水工事を描いた『千本松原』を元に、岐阜県瑞穂市を拠点に活動しているみずほ朗読の会「朋」が出演、台本・演出は同劇団代表の三島幸司。

[日程]2月27日
[会場]ぎふ清流文化プラザ 長良川ホール

●浜松市

浜松市文化振興財団
〒430-7790 浜松市中区板屋町111-1
Tel. 053-451-1150 梅田徹
<https://www.hcf.or.jp/>

第21期主催者育成セミナー受講生企画コンサート「天衣無縫のピアニスト 紀平凱成ピアノコンサート」

一般公募の市民がコンサートの主催に必要な知識を学び、実際にコンサートを企画・運営する浜松市アクトシティ音楽院の主催者育成セミナー。第21期受講生が企画するコンサートには、福岡県出身のピアニスト・紀平凱成を招き、ジャンルを超えた幅広いレパートリーで独創的な世界をお届けする。

[日程]2月19日

[会場]アクトシティ浜松 研修交流センター

●静岡県沼津市

沼津市民文化センター
〒410-0832 沼津市御幸町15-1
Tel. 055-932-6111 鈴木さきえ
<https://numazu-kousya.jp/culture/>

第8回沼津ジャズフェスティバル

静岡県東部地区で活動しているジャズ愛好家たちに日頃の成果を発表する場を提供するとともに、出演者たちの相互の交流を深めてもらうことを目的として開催。コンボやビッグバンドなど、さまざまなジャズ仲間が沼津に集結する。

[日程]2月27日
[会場]沼津市民文化センター

●名古屋市

名古屋美術館
〒460-0008 名古屋市中区栄2-17-25
Tel. 052-212-0001 保崎裕徳
<https://art-museum.city.nagoya.jp/>
現代美術のポジション 2021-2022

1994年に始まった「ポジション」は、名古屋とその近隣地域が輩出している優れた美術家を紹介する現代美術展。グループ展としては6回目の今回は、洋画・日本画・彫刻・映像・インスタレーションの各分野から、今後さらなる表現の深化や、枠を超える展開が期待される中堅・若手の美術家9名が代表作や新作を出品。愛知、名古屋の現代美術の傾向とその水準の高さを概観することができる。

[日程]2021年12月11日～2月6日
[会場]名古屋美術館

●愛知県長久手市

長久手市文化の家
〒480-1166 長久手市野田農201
Tel. 0561-61-3411 千葉あい

▼— 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

<https://www.city.nagakute.lg.jp/bunkanoie/index.html>

長久手演劇王国vol.20「劇王2022～人生を変える20分～」

「上演時間20分、役者3人以内、数分で舞台転換可能」という制約の下で上演される短編演劇の頂上決戦。観客とゲスト審査員の投票により、優勝者「劇王」が決定される。2003年に長久手で生まれ、13回目となる今回は、8名の挑戦者が劇王に挑む。審査員に鴻上尚史、天野天街、赤澤ムックを迎えるほか、オンラインでの配信や若手育成企画などの関連イベントも行い、熱い戦いを盛り上げる。

[日程] 2月5日、6日

[会場] 長久手市文化の家

近畿

●三重県津市

三重県立美術館

〒514-0007 津市大谷町11

Tel. 059-227-2100 原・橋本

<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/index.shtm>

春をまちわびて 美術から考える自然との調和(=エコロジー)

元は生態学を指す言葉だったが、今日では自然や環境との調和を意味する言葉として広く使われる「エコロジー」をテーマとした所蔵品展。自然や環境と向き合い制作された作品を紹介し、気候変動やウイルスによる脅威などが深刻さを増す現代の情勢の中で、今いる場所からエコロジーについて共に考え、持続可能な未来に向かって歩むための一歩となる展覧会を目指して開催。

[日程] 2月23日～4月3日

[会場] 三重県立美術館

●三重県伊賀市

伊賀市文化都市協会

〒518-0809 伊賀市西明寺

3240-2

Tel. 0595-24-7015 友田律子

<http://www.bunto.com/>

クラシックのいろは2021 Vol.3 “2”の世界～2拍子、連弾…～

10年後に地域人口の1%が常にクラシックコンサートに足を運ぶことを目指し、2015年より始まった伊賀市文化会館のシリーズ企画。今年度は「ドヴォルザークに執心!」と題し、寺岡清高のナビゲートでドヴォルザークとその音楽についてわかりやすく解説。2月は2拍子や連弾など“2”をテーマに、イリーナ・メジューエワ(ピアノ)らが『ユーモレスク』などを演奏予定。

[日程] 2月5日

[会場] 伊賀市文化会館

●滋賀県栗東市

栗東芸術文化会館さくら

〒520-3031 栗東市巻2-1-28

Tel. 077-551-1455 坂田拓也

<https://www.sakira-ritto.net/>

さくら創造ミュージカル2021-22『湖上のマドリガル』

「さくら創造ミュージカル」は、開館当初から主催事業として実施している市民参加型ミュージカル事業。13作品目となる今回の作品も、滋賀県にまつわる題材・地域資源を元に脚本を制作。小学生から60歳代まで市民キャスト29人が出演する。作品を制作するに当たり、引き続きプロの作家・演出家を招き、より刺激的で、想像力に満ちた作品の創造を目指す。

[日程] 2月5日、6日

[会場] 栗東芸術文化会館さくら

●京都市

ロームシアター京都

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13

Tel. 075-771-6051 山形ゆき

<https://rohmttheatrekyoto.jp/>

《継承と創造》宮古・八重山・琉球の芸能

シリーズ「舞台芸術としての伝統芸能」を発展させ、古典芸能に加え民俗(郷土)芸能にもフォーカスした公演。今回は那覇文化芸術劇場なはーととの共同企画で、宮古からは島の歴史・あらたな創造を一望できる演目、八重山からは島の外に出ることの少ない唄や踊りが舞台に上がる。また首里城の宮廷でのみ上演されていた曲目が155年の時を経て京都の地で復活するなど、貴重な演目が集う。那覇公演は3月13日。

[日程] 2月11日、12日

[会場] ロームシアター京都

●奈良県奈良市

奈良県立美術館

〒630-8213 奈良市登大路町

10-6

Tel. 0742-23-3968 三浦敬任

<https://www.pref.nara.jp/11842.htm>

奈良県立美術館所蔵名品展

奈良県美から始める展覧会遊覧

日本の書画や洋画、彫刻、陶磁器、染織品、刀剣甲冑、浮世絵、ポスターデザインなど極めて多様な奈良県立美術館コレクションを、「寄贈者」と「奈良県ゆかりの作品」という2つのテーマで展示し、「奈良県のお宝」の魅力をより多くの人々に再発信する。会期中には、京都芸術大学の春日美由紀氏をファシリテーターとする「奈良県立美術館の対話型鑑賞会」(3月20日)などを実施。

[日程] 2月5日～3月27日

[会場] 奈良県立美術館

中国・四国

●鳥取県鳥取市

鳥取県文化振興財団

〒680-0017 鳥取市尚徳町101-5

Tel. 0857-21-8700 野田景子

<http://site.torikenmin.jp/kenbun/>

生演奏によるバレエ

『コッペリア』

特色ある地域文化を題材に、国

内外で活躍するプロフェッショナルのサポートを受けて、地元活動者たちと協働して舞台作品を制作する財団プロデュース公演。今回は、ロマンティック・バレエの名作『コッペリア』を、鳥取ならではのオリジナル版に編曲・再振付し、本公演のための特別編成によるとっとりチェンバーオーケストラの生演奏で上演。2月11日に楽曲の魅力を解説するプレ事業を開催。

[日程] 2月27日

[会場] とりぎん文化会館(鳥取県立県民文化会館)

●香川県丸亀市

丸亀市綾歌総合文化会館(アイレックス)

〒761-2405 丸亀市綾歌町栗熊西1680

Tel. 0877-86-6800 森達郎

<https://www.marugame-ilex.org/>

0歳からのコンサート

0歳からホールで生演奏を気軽に鑑賞できるようにすることを目的とし、今回初めて開催するコンサート。丸亀市を中心に活動している丸亀シティフィルハーモニックオーケストラ(MCO)の演奏で、クラシックやアニメの曲など親子で楽しめる曲をお届けする。赤ちゃんの泣き声も気にすることなく、安心して鑑賞することができ、演奏中の出入りも自由となっている。

[日程] 2月27日

[会場] 丸亀市綾歌総合文化会館(アイレックス)

●高知県須崎市

すさき芸術のまちづくり実行委員会

〒785-0004 須崎市青木町1-16

Tel. 050-8803-8668 川鍋達

<http://airsusaki.machikado-gallery.com/>

現代地方譚9 すさきたゆたう

2014年に始まった美術作家に

よるアーティスト・イン・レジデンス、その成果発表と音楽・演劇公演、短編映画上映や各種ワークショップなどで構成されるジャンルを跨いだ地域の文化振興事業。今回は“まち並み”をテーマに選び、次世代に向けた開発への取り組みと老朽化する既存市街との関係や、入り組んだ“路地裏”といった“まちの隙間”に眼差しを向ける。

[日程] 1月22日～2月20日

[会場] すさきまちかどギャラリー／旧三浦邸

九州・沖縄

●福岡市

福岡アジア美術館

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1 リバレインセンタービル7・8F

Tel. 092-263-1100 中尾・五十嵐
<https://faam.city.fukuoka.lg.jp/>

ヒンドウの神々の物語

古くは先史インダス文明の出土品や女神像から、ガラス絵、民俗画、現代イラストレーションまで約500点に及ぶ作品で、ヒンドウの神々のイメージの変遷を古代から現代までたどる展覧会。多くの貴重な作品・資料を通して、インド文化の基盤となり、厚く信仰されてきたヒンドウの神々とその豊穡なる世界像をさまざまな角度から紹介する。

[日程] 1月2日～3月29日

[会場] 福岡アジア美術館

●北九州市

北九州市芸術文化振興財団

〒803-0812 北九州市小倉北区室町1-1-11 リバーウォーク北九州内

Tel. 093-562-2655 大羽美菜子
<http://q-geki.jp/>

北九州芸術劇場クリエイション・シリーズ『まつわる紐、ほどけば風』

劇場とアーティストが2年かけて

創作に向き合い演劇作品を立ち上げるクリエイション・シリーズの第1弾。2020年にコロナ禍の影響で初日1回限りの上演となった作品の延期公演。劇団太陽族主宰の岩崎正裕が、2018年に地域交流、2019年に作品制作を行う形で、街と歴史と人にフォーカスした作品を創作。現代を生きる女性とそれを取り巻く人々とのドラマを描いた作品となっている。

[日程] 2月17日～20日

[会場] 北九州芸術劇場



『まつわる紐、ほどけば風』
撮影:重松美佐

●宮崎県延岡市

のべおか文化事業団

〒882-0852 延岡市東浜砂町611-2

Tel. 0982-22-1855 飛山千香
<https://nobeoka-bunka.com/>

第56回県北出身の音楽を学ぶ若手演奏家によるジョイントコンサート

音楽を学んでいる宮崎県北出身の学生や若手演奏家が、日頃の成果を地元で披露し、資質の向上に繋げていくことを目的に開催する公演。今回は新型コロナウイルスの影響により1年ぶりの開催で、過去の出演者の協力を得て実施される。梅橋陸実(フルート)、大友未夢(ピアノ)、岸田憲明(バスバリトン)、黒田真美(フルート)が研鑽を積んできた成果を披露する。

[日程] 2月27日

[会場] 延岡総合文化センター

●鹿児島県鹿屋市

鹿屋市文化会館

〒893-0007 鹿屋市北田町

11107

Tel. 0994-44-5115

<http://www.omega.ne.jp/rosy-town/kch/index.html>

高校生ミュージカル『ヒメとヒコ ～ある王の物語～』

大隅半島の中心部に位置する鹿屋市の知られざる歴史・文化を若者たちの手で掘り起こし、地域活性化の起爆剤となるよう願いが込められたミュージカルが今年で15回目を迎える。1500年前の大隅と奄美を舞台に展開される壮大な物語を演じるのは、公募により集まった現役高校生たち。演出・音楽には、大隅出身の松永太郎を迎えるなど、地域発の完全オリジナルの公演。

[日程] 2月5日、6日

[会場] 鹿屋市文化会館

●沖縄県那覇市

那覇文化芸術劇場 なはーと

〒900-0015 那覇市久茂地3-26-27

Tel. 098-861-7810 平岡あみ
<https://www.nahart.jp/>

マームとジプシー-新作演劇公演『Light house』

那覇文化芸術劇場なはーとのこけら落としシリーズとして、劇場とマームとジプシーが共同制作する新作公演。劇場という場の幕開けをlighthouse(灯台)と形容して構想を始め、演劇作家の藤田貴大(マームとジプシー)が、沖縄で営みの場をもつさまざまな人々との対談を実施し、リサーチを重ねて台本を執筆。現代美術家の小金沢健人をはじめ多くのクリエイターが制作に携わる多面的な作品となっている。2月～3月に東京芸術劇場でも公演予定。

[日程] 2月4日～6日

[会場] 那覇文化芸術劇場 なはーと

オンラインを活用した取り組み

新型コロナウイルス感染症の影響により、各地で広がるオンラインを活用した取り組みをご紹介します。

●山口県山口市

YCAMオープンラボ2021

オルタナティブ・エデュケーションメディア・テクノロジーを用いた新しい表現の探求を行うなど、多岐に及ぶ活動を続ける山口情報芸術センター[YCAM]が、その活動の全体像を幅広い層の人々に向けて紹介すべく2017年にスタートさせたイベント「YCAMオープンラボ」。5回目の開催となる今回は、「オルタナティブ・エデュケーション」と題して、NPO法人アーツイニシアティブトウキョウの堀内奈穂子氏らアートと教育に関する実践を重ねるゲストを迎え、オンラインでのトークイベントや収録した対談の映像をウェブサイトで公開する。

[配信期間] 2021年11月26日～2月26日

[URL] <https://alternative-education.ycam.jp/>

[問い合わせ] 山口情報芸術センター[YCAM]

Tel. 083-901-2222



前回の「YCAMオープンラボ2020」の様子(撮影:谷康弘) 写真提供:山口情報芸術センター[YCAM]

▼— 今月の情報 (アーツセンター編)

新たにオープンした公立のアーツセンターを紹介します

アーツセンター情報

●宮城県石巻市

マルホンまきあーとテラス (石巻市複合文化施設)

〒986-0032 石巻市開成1-8
Tel. 0225-98-5630
<https://makiart.jp/>

◎2021年4月1日オープン



東日本大震災で被害を受けた市民会館および文化センターに代わり、文化ホール機能を有する芸術文化センター、博物館機能を有する石巻市博物館から成る複合文化施設として開館。形の異なるでこぼこの屋根が連続する特徴的な5つの三角屋根は、旧北上川に沿って建物が立ち並んだ昭和初期の市内の風景をイメージしたもの。

芸術文化センターはコンサートや演劇などの舞台芸術に加え、講演会や式典などにも対応する多機能型の大ホールと平土間式の小ホールのほか、各種研修室や市民ギャラリーなどを完備。郷土の歴史を紹介する博物館は、常設・企画展示室に加え、設定湿度別に3つの収蔵庫、学芸室で構成される。

震災から10年が経ち、文化・芸術の拠点施設としてさまざまな年代の交流を育み、「心の復興」を推進していく。

[オープニング事業] 宮川彬良×ばんだウインドオーケストラ

[施設概要] 芸術文化センター：大ホール(1,254席)、小ホール(300席)、研修室、活動室ほか/博物館：常設展示室(832m²)、企画展示室(377m²)ほか

[設置・管理者] 石巻市
[運営者] 公益財団法人石巻市芸術文化振興財団
[設計者] 藤本壮介建築設計事務所

●秋田県秋田市

秋田市文化創造館

〒010-0875 秋田市千秋明徳町3-16
Tel. 018-893-5656
<https://akitacc.jp/>

◎2021年3月21日オープン



旧秋田県立美術館の建物を改修し、新たな文化施設としてオープン。多目的に使用できるコミュニティスペースや、展覧会やイベント、創造活動に利用できるスタジオなどを備える。文化・芸術によるまちおこしを目的とした秋田市の「文化創造活動」の拠点として、「すべての人に開かれた環境をつくる」「創造力を養う出会いの機会をつくる」「創造力を秋田のまちにひろげる」などのコンセプトを掲げており、館を拠点に市内でユニークな活動を行う団体をサポートする「秋田市文化創造館パートナー事業」、館の内外をフィールドにクリエイターと共に実験的な活動をする「SPACE LABO」、館内で思いついたアイデアを語る「カルチャカイ」など、多彩なプログラムを展開する。

[オープニング事業] 「秋田市文化創造館のはじまる日。」

[施設概要] コミュニティスペース(貸出面積約228m²)、デッキ(全面約251m²)、スタジオ4室(計約1,177m²)、屋外広場(全面約1,335m²)

[設置者] 秋田市
[管理・運営者] NPO法人アーツセンターあきた
[改修設計者] (株)コスモス設計

●福岡県柳川市

柳川市民文化会館 (水都やながわ)

〒832-0058 柳川市上宮永町43-1
<https://suito-yanagawa.jp/>

◎2020年12月20日オープン



県内有数の観光地であり、国名勝「水郷柳河」に指定された掘割に面する水辺空間沿いの施設であることから、愛称として「水都やながわ」が選ばれた。「つくる：あらたな柳川の地域文化を創造し発信する」「そだてる：時代の文化を担う人材・団体をそだてる」「ふれる：文化芸術にふれ、豊かな創造性を育む」という3つの基本理念を掲げている。ガラスが多用された開放的な建物は、掘割から遊歩道や広場、ロビー、ホールと連続して繋がる親水性の高い空間となっている。柳川出身の詩人・北原白秋の名を冠した大ホールは優れた音響効果を有し、本格的なコンサートの開催が可能。ほかにも多目的なイベントホールやギャラリー、レッスルーム、スタジオなどを備える。

掘割に面する水辺空間沿いの施設という全国的に珍しい立地条件をフル活用し、水と文化芸術が融合した柳川市ならではの事業を発信することで、多様な交流や新たな賑わいを生む交流拠点を目指す。

[施設概要] 白秋ホール(803席)、イベントホール(32.4m²)、ギャラリー(60m²)、研修室・会議室(6室)、レッスルーム2室、スタジオほか

[設置・管理・運営者] 柳川市
[設計者] (株)日本設計

●データの見方

情報は所在地の北から順に掲載しています。●で表示してあるのはアーツセンターの所在地です。以下名称、住所、電話番号、公式サイトURLを記載しています。また、基礎データとして、設置者、運営者、ホール席数など施設概要を紹介しています。

●情報提供のお願い

地域創造では、地域の芸術環境づくりを積極的に推進するアーツセンター(ホール、美術館などの施設のほか、ソフトの運営主体も含みます)の情報を収集しています。特に、新規の計画やオープンなどのトピックスについては、この情報欄に掲載していく予定です。このページに掲載を希望する情報がございましたら、情報担当までご連絡ください。

●情報提供先

地域創造レター担当
Fax. 03-5573-4060
Tel. 03-5573-4183
letter@jafra.or.jp

公立ホールで落語公演を企画する上での留意点など

制作基礎知識シリーズ Vol.50

落語の業界構造

講師 松田健次(放送作家)

落語は大衆芸能において最もシンプルな芸と言える。一人芸で、話芸で、座り芸で、極端な話が座布団一枚あれば舞台は成立する。演者によって披露されるのは「語り」「表情」「扇子・手ぬぐい等の小道具を含む上半身の仕草」と、観客に提供される情報がとても少ない。ゆえに、真に落語という芸が成立するのは、その受け手である観客との相互関係に拠る処が大きい。観客が落語に接し、発せられる語りから物語の情景や人物像をどれだけ頭の中で想像出来るか、それが重要となる。芝居やダンスなど「観る」ことが主の表現に対し、落語の本質は「聴く」ことが主だ。聴いてビジュアルを思い浮かべる。受け手である観客の想像力が体験の深浅に関わる。これは読書体験に近いとも言える。

*「落語の業界構造」を含めた制作基礎知識の連載をまとめた別冊「公立ホール・劇場職員のための制作基礎知識 増補版2021年」を発行しました。入手方法はP4をご参照ください。

●落語家と団体と制度

プロの落語家は現在全国で約900名。2013年には約700名だったので近年かなりの増加傾向にある。落語家は東京と大阪の東西に二分される。江戸時代に遡る芸の発祥と発展が東西の都市で行われ、それぞれ「江戸落語」「上方落語」という総称がある。

落語家には所属団体があり、東は四派、西は二派で分類される(右図参照)。

プロの落語家はすべて師弟制度だ。師匠に弟子入りすることで落語の世界における身分が担保される。東の落語家には階級があり「前座・二ツ目・真打」の呼称があるが、西の落語家に階級制度は無い。

●落語の興行主体

落語家のホームグラウンドは寄席だ。寄席の多くは年間ほぼ休まず営業している(右図参照)。寄席で演者の持ち時間は15分から20分、最後を務めるトリは30分以上。落語家にとって寄席は実践と鍛錬を兼ねた場であり、認知を広めるショーケース的な場でもある。落語家にとって寄席はホームグラウンドであるが、多数の演者が出演する興行のため、出演料は安い。よって寄席以外の他所で開催される落語イベント(落語会)が収入源として重要となる。

寄席以外での公演は落語家が自ら主催する独演会や勉強会などの自主興行もあるが、多くの落語イベントを手掛けているのがイベントであり主催者と呼ばれる経験者達だ。彼らは自ら企画したイベントを制作する他、新聞社をはじめ様々な主催スポンサーの公演制作を請け負ったり、全国のホールに公演企画を販売したり、制作協力したり、多様な形で落語の興行に関わっている。

また、落語イベントは舞台に必要なものが簡素で準備がしやすいため、有体に言えば開催へのハードルが低い。それゆえ、大・中ホールや劇場を主とする職業イベントから、身近な集会施設や飲食店内などの小スペースで落語イベントを手掛ける副業的な世話人など幅広い主催者が存在している。

ちなみに、2020年1月に関東圏内で開催された落語会は、寄席興行を除き大小合わせて

1,023公演(「東京かわら版」より集計)。毎日平均34公演が開催された概算となる。コロナ禍で深刻な影響を受けた2021年1月で738公演。毎日平均25公演である。開催しやすさ、小規模公演の裾野の広さも落語イベントの特長と言える。

●公演での留意点と内容

落語イベントの公演時間は概ね2時間から2時間半以内が適当だ。その際、合間に10分~15分の休憩を入れるのが望ましい。主に「聴く」芸である落語は、観客の集中力を保つ配慮を要する。その留意を欠くと、たとえ好演であっても「時間が長い」「腰が痛くなった」等の不満を招きやすい。また長時間の集中力を欠きがちな未就学児童の入場可否は検討がマストだ。親子室があればきちんと活用したい。

公演内容には概ね3つのパターンがある。「独演会」「2人会(もしくは3人会)」「寄席形式」だ。「寄席形式」は若手、中堅、ベテラン、色物(漫才、紙切り、太神楽、俗曲ほか)などを散りばめたバラエティに富んだプログラムとなる。

また落語には「古典落語」と「新作落語」がある。「古典」は江戸や明治が背景で、広く知られる『寿限無』『時そば』『芝浜』等は古典だ。「新作」は時代背景を問わないが主に現代を描き、落語家自身や作家のオリジナル作品である。

落語家によって「古典派」「新作派」「両道派」と芸種があるため、どの落語家が出演するかで古典か新作か概ね規定される。落語家各々の芸風に詳しくなれば、より興趣に充ちた企画を考案する心強い材料となる。

●公立ホールによる開催と企画

公立ホールが主体となって落語イベントを開催する場合、最初に考えるべきは劇場のキャパシティに合う企画の検討だろう。キャパが300人、500人、800人、1,200人など客席数の違いによって企画の構想はシビアに変わる。

落語は他ジャンルに比べ、出演者が少なく、舞台も音響も照明もシンプルでベーシック。つまり舞台制作の経費が少ない。採算ラインが低い芸能である。だからと言って集客が少なくてもいいわけではない。演者のモチベーションは客席の埋まり具合に大きく左右され、笑いや拍手の量

に影響されるものだ。まず目指すべきはキャパの7割～8割以上の集客が見込める企画が望ましい。もちろんそれ以下のスタートから公演回数を重ねて観客を育てていく方向もある。その場合は予め出演者にホール側の意向を伝えておくなど信頼関係を築いていくことも考慮したい。

落語イベントの企画を構想する際に、参考となるのが落語情報誌だ。関東圏であれば有料小冊子の『東京かわら版』。関西圏ではフリーペーパーの『よせびっ』(公式ブログから無料ダウンロード可能)。どちらも月刊でその月に開催される落語会の情報が大小くまなく網羅されている。これら情報誌は落語ファン、落語業界関係者、そして落語家本人にもスケジュール確認等に利用されている。この情報誌から近々行われる落語イベントの「企画」「出演者」「会場」「料金」「主催者」などが一望できる。どの落語家がどれぐらいの会場規模で公演しているのか、2人会や3人会ではどんな組み合わせが実現しているのか等々、企画の参考となる情報が詰まっている。気になる公演や落語家は可能であれば実際に視察もしたい。

この企画段階からイベンターや経験豊富な主催者に加わってもらい、助言を受けることも一般的だ。また地域によっては、社会人によるアマチュア落語、大学・高校の「落語研究会(通称:オチケン)」、小・中学生による「子ども落語教室」等、落語実演をたしなむ人々もいる。彼らとコミュニケーションを取り、企画のニーズに触れるのも有用だろう。

その上で、ホール側が落語イベントでどんな企画を実現したいのか主体性を保つことで、将来的なプロデュース能力を養いたい。

など多岐に渡る。ホール側とイベンター側で、誰が何を担当するかの分担を決めることになる。

それにより全体の収支の流れも決まってくる。ホール側がチケット販売で収入を得て、出演料、経費、制作費をイベンターにグロスで支払うパターン。イベンターの業務を限定し制作協力費のみを派生するパターン。または、ホール側がイベンターにチケット販売や協賛収入など収支全般を一任し、イベンターから会場使用料を得るパターンなどが主に考えられる。

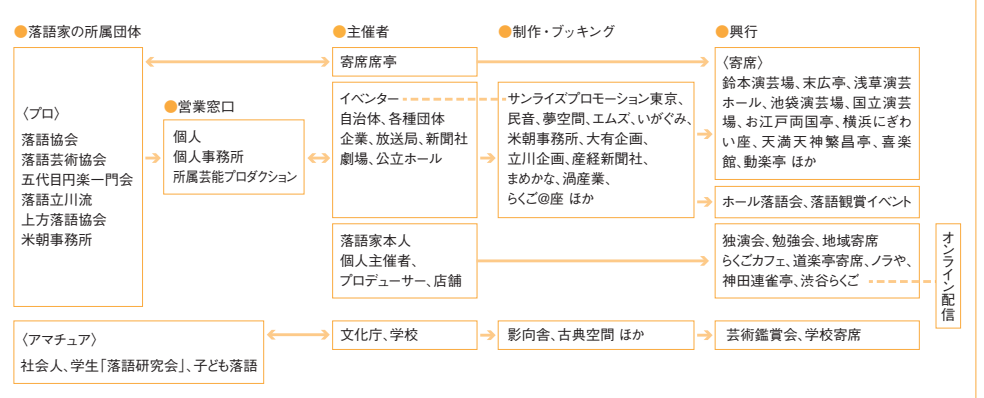
●落語の成否を左右するものとは

落語と他の芸能の大きな違いのひとつに、技量のある落語家は演目を当日現場で決めることが挙げられる。予め演目を発表する「ネタ出し」の公演もあるが、そうでない場合、落語家は高座でマクラ(ネタに入る前の漫談や小噺)を喋りながら観客の年齢層や男女比や反応を見て演目を決めている。予め幾つかの候補を想定し、観客に合う演目を選択しているのだ。改めて落語という芸は、落語家と観客の相互理解が重要なのである。ゆえに、高座、音響、照明、観客マナー、劇場スタッフの対応など、どこかに配慮が欠けてしまい落語空間への集中を寸断してしまうと、それが高座の印象を大きく損ねることになる。主催側が落語への理解を深め、開催の経験を重ねることで劇場環境のクオリティが上げられ、それが公演の満足度につながる。落語は、「落語家・観客・劇場空間」という三者の相互補完で成立し成否が左右される。シンプルゆえに深く、長く付き合いがいのある大衆芸能だ。

●ブッキングと制作と予算

企画の次はブッキングである。スケジュール交渉の基本経験があれば公立ホールのスタッフが交渉責任者となって落語家本人(またはマネージャー)と交渉してもいい。その経験に乏しければイベンターや主催経験者に業務を委託する方法もある。制作業務は、ブッキング、宣伝、チケット販売、舞台制作、配布物作成、交通の手配、物販の確認、アテンド、出演料支払い

落語業界の構造



▼— 今月のレポート

財団の支援事業や地域の創造活動に参考になる催しを取り上げてレポートします

北海道深川市

深川市文化交流ホール
み・らい
音楽劇 みらいSHOW学校
劇と音楽の展覧会
『時をこえて深川』



上:中川賢一(左)と村上敏明/下:5つの劇の
ひとつ『真悲死(まかなし)』のシーン
写真提供:深川市文化交流ホールみ・らい

● 音楽劇 みらいSHOW学校 劇と音楽の展覧会『時をこえて深川』

【日程】2021年12月18日

【会場】深川市文化交流ホールみ・らい

【主催】NPO法人深川市舞台芸術交流協会 / 深川市教育委員会

※「音楽から着想するストーリー」をコンセプトに6月から全6回の戯曲講座を開催。中川賢一が生で演奏する「展覧会の絵」「月の光」「鐘」、村上敏明が歌う「紫陽花」などの音楽からインスピレーションを得て、参加者が短編戯曲5作を書き下ろした。今回の「みらいSHOW学校」はコロナ禍の延期を踏まえて仕切り直され、若手演劇団体の旗揚げを目指す新たな3カ年事業の1年目として実施された(来年度はミュージカル公演を予定)。

● 深川市文化交流ホールみ・らい
老朽化した市民会館の建て替えにより、地元文化団体有志による市民協議会の議論を経て、2004年開館。691席のホールやワークショップルーム等を含み、06年から市民協議会を前身とするNPO法人深川市舞台芸術交流協会が指定管理者として運営。05年に公共ホール音楽活性化事業(おんかつ)に参加したのをきっかけに、さまざまな形で地域創造登録アーティスト・支援アーティストを招聘。その数は21年までで計30名に上り、アウトリーチや市民参加事業、サロンコンサートなどを展開。16年からは市内全8校(小学6校、中学2校)でアウトリーチを毎年実施。

北海道の中部、石狩川が流れる空知地域はかつて石炭産業で大繁栄したエリアだ。今では過疎地域だが、深川市文化交流ホールみ・らいなどが活発に活動している。深川市の人口は約2万人に減少したものの、5つのアマチュア劇団や3つの合唱団が今も活動している。

2021年12月18日、コロナ禍による2度の延期を経て、そうした市民約100人が参加する「音楽劇 みらいSHOW学校 劇と音楽の展覧会『時をこえて深川』」が上演された。



感染症対策で1席飛ばしにした客席は満席。空知の4つの太鼓集団が合同で新曲を披露するオープニングで舞台が始まった。

劇作家・演出家の岩崎正裕による戯曲講座で市民が描き下ろした短編5本を地元劇団の演出家がそれぞれの持ち味で演出し、手練れの俳優たちが適役で出演。また、ピアニストの中川賢一とテノールの村上敏明が、各作品に関連した曲をエピローグ・プロローグで生演奏するなど贅沢なプログラムになっていた(ちなみに、岩崎、中川、村上ともに地域創造の事業に長年取り組んできた地域でのエキスパート)。

作品は、阪神・淡路大震災の復興祈願の曲をモチーフにしたみ・らいの三ツ井育子館長による『暁の聲』、團伊玖磨の歌曲からイメージした亡きカメラマンの夫と母娘のドラマ『紫陽花』、田舎で舅に仕えた嫁の人生を描き、地元合唱団も出演した『真悲死(まかなし)』など。また、作品の転換時には朗読グループのメンバーが次の作品を紹介する工夫も行われていた。

そもそもは2017年に“異色のコラボ”による3カ年事業「みらいSHOW学校」(アドバイザー&出演:中川、演出:岩崎)を立ちあげたのが始まり。初年度は、ダンスグループを育てたいと、ダンサーや市民、音楽家などがコラボしたステージを発表。2年目には書道などの展示系文化団体の交流を目指し、岩崎による主宰者へのインタビューとパフォーマンスを舞台で行うライブを企画。そして、3年目に予定していたのが地元劇団の活性化を目的にした今回の事業だった。

三ツ井館長は、「文化団体では同じ人ばかり

が活動している。市民参加事業として彼らが交流できる“異色のコラボ”を企画した。高齢化と過疎化が進む中、衰退する活動を何とか若手に繋ぎたい、新しい人を育てたいという気持ちで企画を考えている。今回は脚本家を育てたい、太鼓集団と一緒に演奏できる新曲をつくりたい、コロナで活動できなかった合唱団も何とかしたいという思いをすべて詰め込んだ」と言う。

深川に10年以上足を運び続けている中川は、「み・らいは、地域の文化をどう耕していくかを考えた斬新な企画を立てている。これほどジャンルを縦横無尽に組み合わせているのはここだけで、そこからさまざまな関わりが生まれている」と言う。

20数年前から市民劇に携わってきた岩崎は、地域の人が創作する重要性を指摘する。「戯曲を書くことで土地や相手のことを理解しようとするところに作家性が生まれ、書き手の人生が滲む。そこに俳優が加わって地域が見えてくる。今回のような異種格闘技には、フィクションによってさまざまな要素を絡めることができる演劇の機能が不可欠だ。市民が自ら作品をつくることで文化施設は市民の広場になると思う」。

では、当事者である地域の人々はどう感じたのだろうか。72歳の時に『真悲死』を書いた村田信子さんは、「読書などは好きだったが、戯曲は初めて。講座に参加してすぐに楽しいと思った。幌加内にある坊主山に雪が降っているところをイメージし、経験も踏まえて書いた。本番を観て、こんな形になるんだと信じられなかった」と感動の面持ちだった。

また、空知の合唱団の指導者として知られる工藤昌晴さんは、「深川の合唱団有志と公募を合わせて34人が参加した。思うように稽古できないなか、今回は舞台作品の一部として合唱があったし、プロと共演するためにこのぐらいまでレベルを上げておかなければというミッションがあった。みんなで一緒につくっていくんだという思いが強かった」と振り返っていた。

市民の文化活動を次代に繋ぐという揺るぎなさに、公立ホールだからこそその懐の深さを感じた取材だった。(河野桃子、坪池栄子)